FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

2022.6.23 No.65

令和４年度夏季特別展

ふくいの御乗物

溜漆総網代乗物
（若狭小浜藩主酒井忠勝拝領の三代将軍徳川家光所用乗物）
発心寺所蔵（福井県立若狭歴史博物館寄託）
福井県指定文化財

1 「ふくい」の「御乗物」とは

特別展のタイトルをご覧になって、「ふくい」とは何か、「御乗物（おのりもの）」とは何か、と思われた方もあるでしょう。

ここでいう乗物とは、時代劇に出てくることもある、身分のある方が乗られる駕籠（かご）のことです。画像を見れば一目瞭然と思いますが、乗る人が入る部分が箱形で、それが担ぎ棒に吊られるような形状をしています。なかでも、今回の特別展に出品されるのは武家身分、地域貢献に尽くした有力者が乗った高級な乗物が主なので、あえて「御」をつけて「御乗物」としています。

童謡「おさるのかごや」にイメージされるような山道を往く山駕籠、宿駕籠は、竹材を組み合わせて逆台形にしたハンモックのような形状をしています。今回は、これを「駕籠」として「乗物」とは区別して展示させていただきますが、じつは駕籠も民具として貴重な研究対象であって、実際に調査をしてみると乗物よりも圧倒的に残存数が少ないのです。調査先で「昔は、うちにもあったけれども燃やしてしまった」というお話もうかがいました。たしかに比較的存在感のある乗物よりも、可燃物として扱われやすいのかもしれません。

そして、「ふくい」の指すところですが、今回は福井県内という意味で使います。「ふくい」を漢字で福井とすると、福井市もしくは福井藩といった狭義の意味と捉えられる可能性があるがあったので平仮名にしました。

大まかに福井県内を指すならば「越前・若狭」、「嶺北・嶺南」、「福井県」という言葉でもよいのに、「ふくい」とした理由は、それらでは駕籠・乗物が使用された時期が微妙にずれるので、言葉として適当でなかったためです。

調査を始めた当初は、乗物が使われたのは江戸時代から明治初期までと勝手に思い込んでいました。ところが、聞き取り調査をしていくうちに、随分と乗物の使用期間は長いということがわかってきました。昭和30年代（1950～60年頃）まで現役だった乗物が複数挺（ちょう）あること、江戸時代以降に新規で作った乗物、江戸時代の骨組は利用し、改修して使っていた痕跡がある乗物があったからです。70歳以上の方からは、子どもの頃に（つまり昭和30年代頃）にお寺の式台から乗物にうやうやしく御住職が乗られて、その乗物には白い分厚いふかふかの敷物が敷いてあったこと、乗物の出立を皆でお見送りをしたことを覚えているという興味深いお話もうかがうことができました。

そうなると現在の福井県の領域が「越前国・若狭国」であったのは江戸時代までの間、「嶺北・嶺南」は明治6年（1873）以降に意識された概念、今の福井県の領域で福井県が成立したのは明治14年（1881）以降ですので、今回ご紹介する乗物の時代、すなわち江戸時代前期から昭和30年代までを示す言葉としては、「越前・若狭」、「嶺北・嶺南」、「福井県」のいずれも当てはまらなかったのです。

2 乗物の研究の今

乗物という言葉だけではイメージがわかなくても、画像を見れば駕籠のことだとわかる人が大半だと思います。駕籠・乗物はみんなが知っているものだから、当然その研究実績も豊富にあるのだろうと思われがちですが、

紺地唐草紋天鵞絨貼乗物
（若狭小浜藩筆頭家臣酒井伊織家の姫所用）
浄蓮寺所蔵（若狭三方縄文博物館寄託）

じつは全国的にみてもとても少ないです。大学や博物館・美術館の研究者の専門分野でも、乗物の研究者はごくごく少数のようです。

おそらく乗物が、美術工芸史、歴史学、民俗学、建築にまで多分野にまたがる研究対象で複雑な文化財であるがゆえに、一人の研究者では調査研究を始めにくいということがその背景にあるのではないかと思います。

すなわち、使われている素材や制作技法は漆塗や網代（あじろ）（木材を細く薄く切って編んで模様とする技法）が多用され、蒔絵や金箔貼、内部には絵画、金具には金工の技術が使われているので美術工芸分野、豪華な屋根や破風（はふ）などは木材加工技術の産物なので建築の対象にもなり、乗物自体の来歴や移動、使われ方などは歴史学や民俗分野の研究範囲で、それらを総合的に研究しないと評価できず、多角的な視野が求められるということが研究を難しくしているのだろうと思います。

ゆえに、乗物を対象とした展覧会は全国的にも珍しくほとんどありませんが、幸いにも江戸東京博物館で平成2年(1990)に開催された特別展「珠玉（たま）の輿～江戸と乗物～」、平成20年(2008)に開催された大野市歴史民俗資料館特別展「駕籠」という先達となるべき展覧会がありました。

江戸東京博物館は全国の武家女性所用の乗物を、大野市の駕籠展は大野市内の駕籠を公開・紹介する展覧会でしたが、このたびの展覧会は、それらにヒントと勇気を得ながら、新たにオール福井、福井県内全域を対象とした乗物主体の展示です。乗物の展覧会としては、まだまだ全国先駆けの部類に入るのではないか、と思います。

3 乗物と輿、そして乗物に関する江戸時代の記録

乗物に似たものに「輿（こし）」があります。人が乗る箱型の部分の下に長い棒があって、その棒を持ち上げて浮かせて移動するものです。

日本でも棒が箱型の上につく「乗物」と棒が下につく「輿」は両方存在します。

江戸時代では、日常は「乗物」を用いますが、天皇に関わること（例えば官位を賜る時、参内する時）と正月の江戸城登城の際に用いるのは「輿」です。

歴史的には「輿」の歴史の方が圧倒的に古く、また世界的に見ても輿は中国、朝鮮半島、日本にその類例がありますが、乗物は日本で16世紀以降に発達した、かなり独自な形状のようです。（ちなみに、冒頭で乗物と区別した「駕籠」は、乗物とは派生が異なるという説がありますので、さらにまた別です。）

さて、この日本固有の「乗物」が、日本史上に記録として出てくるのは、中世後期、戦国時代以降であって、それ以前、15世紀の室町幕府政権下では越前朝倉家が使用を認められたように「輿」が権力の象徴とされていましたが、16世紀後半に豊臣秀吉が催した醍醐の花見を描いた「醍醐花見屏風（だいごのはなみびょうぶ）」では秀吉が愛した女性たちは乗物の形状をしたものに乗っています。日光東照宮には17世紀初めの徳川家康所用の品が伝来していますが、乗物の形状です。このあたりがターニングポイントのようで、乗物は初めは男性よりも女性などが乗るものとして出現し、江戸時代に入って武家に、そして次第に庶民にも駕籠・乗物が浸透して一般化されました。

そして、乗物が江戸時代にあまりにも日常にあるありふれたものになってしまったためか、乗物について詳細に特徴を記した江戸時代の古文書というのは、「守貞謾稿（もりさだまんこう）」を除くとほとんどありません。

「守貞謾稿」とは、江戸時代後期の19世紀に喜多川守貞が編んだ、当時の百科事典のようなもので、この本に「乗物」の項目があります。様々な乗物の形状を、図や文章を交えて「男乗物」（将軍や医師などの男性が乗る乗物）、「女乗物」（女性が乗る乗物）と区分しながら解説しています。

福井県内の乗物調査は、この「守貞謾稿」の記述を頼みの綱として始めました。

初めは、福井県内にはたくさんの藩がありますから、

藩ごとに乗物の仕様もまちまちであったらどうしようか、と不安に思いながらの調査でしたが、いざ取り掛かってみると、それは杞憂でした。

福井県内の乗物は「守貞謾稿」の記述にほぼ合ったものが出てくる、稀にどこか異なっていてもおそらく「守貞謾稿」で紹介されているものの亜種　だろうと推測できるものばかりであることがわかったからです。これは他の都道府県での乗物調査と比較して見なければわかりませんが、全国各地で独自性のある乗物を作っていたのではなくて、ある程度の基準があったのではないかと思わせます(もちろん、ご当地特有の形状もあるのだと思いますが)。誰もがどのような乗物にも乗れるわけではなく、江戸時代は厳然たる身分制があり、乗ることができる乗物(そもそも乗物に乗れる人が限られる)はその身分に規定されると考えれば、基準はあってもおかしくないのかもしれません。ただ、「守貞謾稿」に図はなく文字だけで説明されている乗物の部品などは、読んでいてもわかりません。ただただ県内伝わる乗物の実物を拝見して、本の記述と比較して考えるという繰り返しでした。

こうして、最初は全く手探り状態だったのですが、県内、調査する行く先々で、「どこどこにも駕籠があるよ」という情報をいただき、わらしべ長者の気分で次々と訪問することができ、50挺を超えるあたりでようやくなんとなく福井県の乗物の体系がわかってきた感じがしてきました。

4 調査のそもそものきっかけは、嶺南と嶺北の違いから

調査に行く先々で「どうして駕籠に興味を持ったのか」とよく尋ねられるのですが、乗物に関心を持った元々のきっかけは、転勤の関係でたまたま私が嶺南と嶺北の歴史・文化の違いに気がつきやすい立場にいたからだと思います。

嶺南にいた時も若狭歴史民俗資料館(今の若狭歴史博物館)で若狭地域の調査に関わらせていただく機会があり、たくさんのお寺と関わる中で若狭でも寺院に数挺の乗物が伝来していることは知っていました。しかし、嶺北に転勤してから、お寺をお訪ねするうちにどうやらこの地域には若狭とは比較にならないほど駕籠・乗物が多いということがわかって、本格的に嶺北で調査を始めてみると予想を超えてたくさんあるのだと次第に確信するようになりました。

櫻井芳昭氏の研究(『駕籠』、物と人間の文化史141、2007年、法政大学出版局)によれば、乗物が多いとされる愛知県では145挺余確認されていますが、福井県はいまだ全貌は掴めないながらもおそらくそれ以上に存在する手応えがあるのです。

おりしも、昨年、東北で駕籠についての講演をなさった東北生活大学の落合里麻先生は、全国的にも伝存数が多いのは、愛知県と福井県と明言され、ご論文でもふれられていたことを知り、私の独りよがりではないと思うようになりました。(このたびの特別展の記念講演講師としてお招きしています)。

そして、次に乗り物が嶺南ではなく嶺北に偏在しているのはなぜなのだろう、そのことも福井県の嶺北・嶺南多様性を探る手がかりなのではないだろうか、と調査しながら考えるようになりました。

さまざまな宗派の寺院に乗物は伝来していますし、現時点では調査途上から見える傾向としか言えませんが、結論から言うと、おそらくこれは嶺北に真宗が強く影響を及ぼしているからなのではないかと考えています。愛知県も福井県嶺北も蓮如上人が精力的に布教した地であり、今も真宗寺院が多く、嶺南には少ないということとも一致します。また、嶺北の中でも局所的に乗物が残るエリアと残らないエリアがわりとはっきりとしている傾向にあります。決して狙ったり、意図して訪問先を選んだわけではないのですが、ある種の乗物がある寺院は、中世まで遡る由緒があって古街道に面した立地であるという共通点があることも次第に経験からわかってきました。さらに福井から全国に視野を向ければ、越前・若狭と上方(都)との文化的距離も考えられそうな気がします。

「乗物」という「知っているようであまり知らない」地味な文化財から、県内地域の多様性を浮き彫りにするということも可能かもしれないと思っています。

今回の特別展は、展示スペースの関係もあって出品をお願いさせていただいた乗物の数もかなり少なく、駕籠・乗物合わせて十三挺です。おそらく百挺を超えるであろう県下の乗物の数からすればささやかであることは否めません。しかしながら、おかげさまで福井県内にある越前・若狭のお姫様、お殿様が乗られたという伝承がある乗物の全て、藩の御殿医、豪商など、武家階級と地域の有力者が乗られた乗物ほとんどの出品が叶いました。

全国一、二を争うであろう乗物の伝来数といい、その特徴といい、福井県内の乗物の調査研究は「地味にすごい福井」という福井県の北陸新幹線開業に合わせたキャッチフレーズそのままだと感じています。

今回の特別展「ふくいの御乗物」は、調査途上の中間報告的展示であり、全国でもあまり例がない乗物の公開として、実験的な展覧会です。

それにも関わらず、福井県内の多くのお寺様、関係者の皆様には、あたたかい応援のお言葉とともにご協力、ご支援をいただきました。

深く感謝いたしますとともに、今回の特別展「ふくいの御乗物」をきっかけに調査が進み、福井県の新たな魅力を引き出すことができれば幸いと思います。

(有馬香織)

研究ノート

田代家文書から見る橋本左内

当館では令和3年(2021)2月に田代家文書約90点を一括で購入しました。

田代家は鎌倉時代に源頼朝の挙兵を助けたとされる伊豆の武士の田代信綱から始まり、戦国時代に医聖と称された田代三喜を輩出した関東の名家です。その一流が福井藩に仕え、文書を伝えました

田代家文書には、戦国時代の越前の猛将である真柄十郎左衛門の一族が田代家を継承したことから、真柄一族に関する資料が含まれており、その内容については、『福井県立歴史博物館紀要』(特別号、2022年)で詳細に紹介したところです。

しかしながら、田代家文書には、他にも重要な資料が含まれています。それが、幕末の志士として全国的に有名な福井藩士の橋本左内に関する新資料です。

実は、左内の父の長綱は田代家の出身です。田代春綱の三男で、君命により、同じく福井藩の橋本家の養子になりました。そのため、左内や長綱に関する資料が長綱の実家に当たる田代家に伝来したのです。

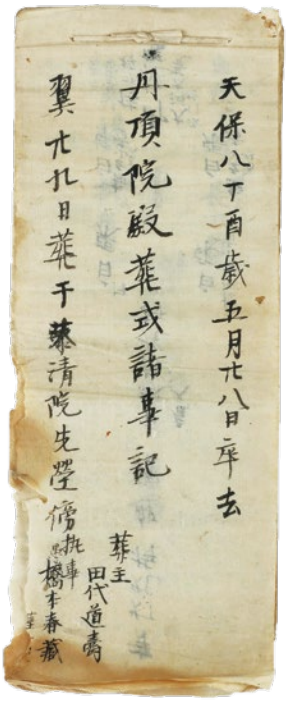
左内の新資料は丹頂院殿葬式諸事記と題し、天保8年(1837)に亡くなった丹頂院殿の葬式に関わる行事や費用などを記した帳簿です(本頁下段参照)。丹頂院殿は長綱の兄の田代春郷を指します。

この資料を見ると、葬主は春郷の子の田代道寿(春熙)、執事は橋本春蔵(長綱)とあります。執事に「愚弟」と書き添えられている点から、長綱の自筆書と見られます。そこには、納骨参りを行い、香典料を納めた人物として、長綱一家の名が見え、当時4歳であった左内も確認できるのです。

この資料の内容で重要な点は三つあります。

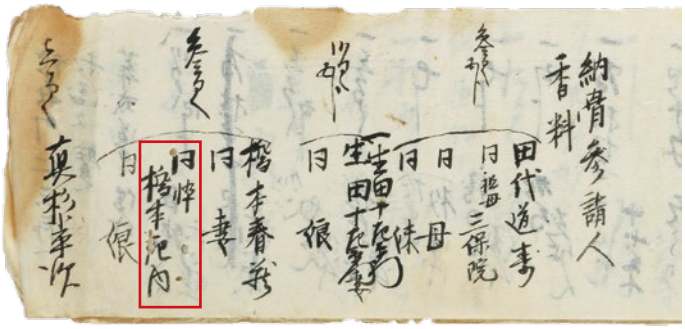
一つは、従来、左内は天保5年に生まれ、7歳で漢籍詩文を学び、15歳で『啓発録』を著したとされてきましたが、本資料は、左内の誕生に続く、最も古い事績を示すものとして、貴重であるという点です。

二つ目は、従来、「左内」という通称の初見は、『橋本景岳全集』(1939年)によれば18歳でしたが、左内は4歳の時点で「左内」を称していたことが判明した点です。田代家文書の別の資料では、長綱の父の春綱が幼少から「左内」を称していたことも明らかとなり、



天保八丁酉歳五月廿八日卒去
丹頂院殿葬式諸事記
翼廿九日葬于泰清院先栄傍　葬主　田代道寿
執事　愚弟橋本春蔵
[　　]

丹頂院殿葬式諸事記(一丁表)



納骨参詣人
香料
参匁五分　田代道寿
同祖母　三保院
同　母
同　妹
弐匁五分　生田十左衛門
生田十左衛門妻
同　娘
参匁　橋本春蔵
同　妻
同忰　橋本左内
同　娘
壱匁　真杉小平次

同(四丁表)

その影響があった可能性があります。また、一般的には、元服の際、幼名をやめ、諱・通称を使用し始めることが多かったのですが、左内は幼少期から、元服後も、26歳で亡くなるまで、一貫して「左内」を使用し続けたことが分かります。その理由は明らかにしえませんが、「左内」はもともと戦国時代以降の関東武士の通称である東百官の一種であり、関東武士を祖とする田代家では「左内」をそのように使用していたのかもしれません。

三つ目は、従来、長綱・左内と田代家の関係を示す資料は少なく、たとえば、左内と母の梅尾との往復書簡に「あまくさ町のたしろ」(隣家の田代家とは異なる)として登場するのが数例知られる程度でしたが、その新たな一例が追加されることとなります。加えて、長綱一家は養子後も田代家の一族として位置づけられていたことも分かります。

以上の新資料のほか、田代家文書に含まれる系図類から、田代家の詳細な系図を復元し、左内の系譜を明らかにできた点も重要です。

従来、長綱の養子先である橋本家の系図はよく知られており、その祖が室町時代の武将で幸若舞の創始者の桃井直詮であることも有名です。一方、田代家については、『橋本景岳全集』の「父長綱の略伝」に「君は田代大膳大輔源信綱三十三世の孫道玄斎春綱の第三子にして、君命により橋本春貞の嗣となりし者なり」とあるくらいで、その系図に触れた研究は管見の限り見当たりません。むろん、福井藩士履歴などの福井藩の公的記録から、田代家当主の履歴を確認できる状況にはありましたが、今回、田代家文書の発見によって、田代家の私的な動向を含めて、詳細な系図を初めて復元することができました(次頁参照)。

この系図から分かることは、左内は田代家の血筋を引いていたという点です。左内―長綱―春綱―信周―周綱と遡ります。周綱は福井藩田代家の6代目当主ですが、その実父は稲井田貞順とされ、関東に本拠地があった田代家本家(関東田代家)の血筋を引きました。従って、一歩踏み込んで言うと、左内は関東田代家の血筋を継いでいたということになります。この関東田代家は、他の確実な資料では、上杉家文書の永禄年間(1558～70)初期の関東幕注文に「宇都宮」の「田代中務大輔」、宇都宮二荒山神社に伝来した慈心院造営日記の文明12年(1480)11月条に「田代中務大輔」などと見え、下野国の戦国大名であった宇都宮氏に仕えた田代中務大輔という人物を確認できます。さらには、長綱の略伝にあるように、鎌倉時代の田代信綱に繋がると伝承されています。すなわち、左内の先祖は関東武士の田代家だったのです。

また、この系図によって、田代家との関係から、左内を捉え直す視角が生まれたことも重要です。先述したように、左内の「左内」という通称は、祖父の春綱や関東武士であった先祖の影響を受けたものである可能性があります。また、長綱の「綱」は田代家の通字「綱」の影響を受けたもので、綱紀(左内)の「綱」はその父親の「綱」を譲り受けたものである可能性があります。さらには、長綱や左内の武士を意識した行動や武士への憧れが見られる点は、橋本家だけでなく、田代家の先祖を意識したものである可能性があります。このように、これまでほとんど注目されてこなかった田代家との関係から、左内の人となりの一端を解明しうるかもしれません。

ちなみに、この系図からは、左内と真柄十郎左衛門が遠い親戚であったことも判明しました。『福井県立歴史博物館紀要』(特別号)で述べたように、真柄十郎左衛門の一族の宮寿丸は、関東田代家の綱通の猶子となり、田代家の名跡を相続し、田代養仙と称し、福井藩田代家の初代当主となりました。真柄の血筋は孫の代で途絶えますが、家自体は福井藩士久世家から養子を迎えて存続し、さらには、関東田代家から養子を迎え、先述した6代目の周綱に至ります。従って、真柄十郎左衛門と左内は、時代を隔て、血は繋がらないけれども、家としては親戚関係に当たるわけです。

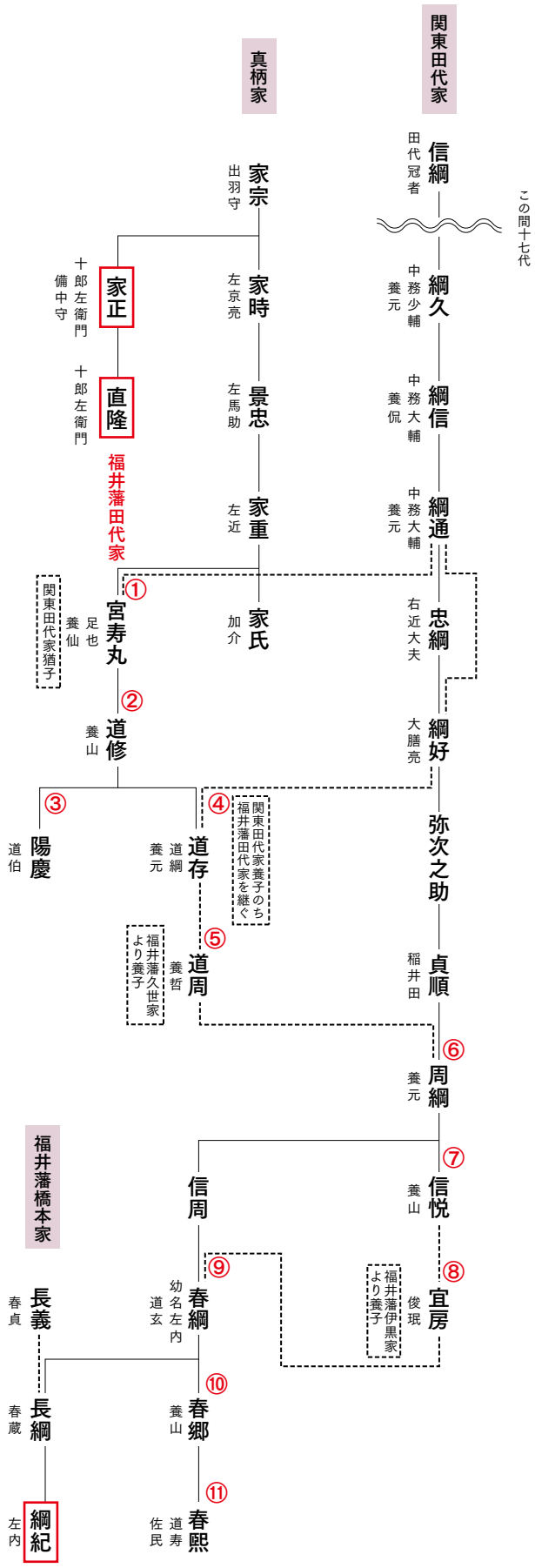
以上のように、田代家文書は真柄十郎左衛門だけでなく左内の研究の進展にも寄与しうる文書群として貴重と言えます。

また、付言しておきたいのは、関東田代家の研究の進展にも寄与しうる点です。関東田代家については、田代三喜を中心に多くの研究があり、子孫は秋田藩や松江藩などに存在しました。かつて佐藤博信『古河公方足利氏の研究』(1989年)では、関東田代家の本拠である宇都宮に住し、最も早くから資料に現れる田代中務大輔家の家系の軌跡は不明とされましたが、今回、その家系の文書群が発見され、系図が復元されました。これにより、関東田代家全体の系譜関係の解明にも繋がるものと期待されます。

＊なお、角鹿尚計氏・長野栄俊氏・本川幹男氏・柳沢芙美子氏・山田裕輝氏には種々ご教示を賜りました。記して謝意を表します。

(大河内勇介)

田代家文書等から分かる 福井藩田代家をめぐる系図



＊実線は実子、点線は養子・猶子。
＊丸数字は福井藩田代家の代数。
＊福井藩に関する給帳類、御医師・御鍼医・御目医師・御外科御記録書、諸士先祖之記、姓名録、福井藩士履歴、禄高帳も参照した。

館蔵資料紹介

「東京五輪ユニフォーム」
（落合治氏旧蔵　東京五輪関係資料より）

［時　代］昭和39年（1964）

東京五輪は、昭和39年、近代オリンピックの第18回大会として東京で開催されました。アジア初のオリンピック開催であると同時に、昭和15年に第12回大会を返上し、第二次世界大戦で敗戦国となった日本が戦後復興を果たしたことをアピールする意味も込められていました。

この東京五輪に、福井県出身者の日本代表選手として唯一、出場したのが落合治（おちあいおさむ）氏です。氏はラピッドピストル競技（射撃）の選手で、前回のローマ五輪から連続での出場を果たしました。

このユニフォームは、落合氏からご寄贈いただいた東京五輪・ローマ五輪関係資料のひとつで、日本代表選手団の開会式用にデザイン・製作されたものです（画像1）。帽子からブレザー、スラックスまで選手ひとりずつ仮縫いが行われた「オーダーメイド」の品でした。

ユニフォームは、金色の箱に入れられて配布されました。箱の表面には「BLAZER FOR GAMES OF THE XVIII OLYMPIAD TOKYO 1964」の表記と日の丸、五輪マークが施され、内側の包み紙には「ご健斗をお祈り致します」との文言が印刷されています。ちなみに、東京五輪のひとつ前、ローマ五輪の開会式用ユニフォームには「パレードの服装について」として、注意事項も付されていました。「結団式、入場式、閉会式、解団式其他本部又は監督の指示以外には着用しないで下さい。」とあり、あくまでも選手団として所定の儀式に臨む場合にのみ着用したものとわかります。東京五輪についても、同様の取扱いであったと考えられます。

さて、このユニフォームは、赤いブレザーと白いスラックスという一見するとシンプルなデザインです。しかし、細かく見ていくと、五輪マークや日の丸が随所にあしらわれた凝ったデザインであることがわかります。たとえば、胸元の日の丸の下の五輪マークは刺繍ではなく、細い金属線を巻き、縫い取ってあります（画像2）。ブレザーの袖口や前ボタンには、五輪マークと日の丸、「TOKYO」の文字が浮き出され（画像3）、ベルトのバックルには旭日と五輪マークがあしらわれています。さらに、バックルの裏面には「THE GAMES OF THE XVIII OLYMPIAD 1964 TOKYO JAPANESE DELEGATION」（第18回オリンピック大会 1964　東京　日本代表団）と打ち出されています。

画像1

ユニフォームの裏も確認してみましょう。ブレザーの裏地の地模様にも五輪マークが織り込まれ、スラックスの腰回りの裏地は「TOKYO 1964」の細幅織物です（画像4）。

こうしたディテールをひとつひとつ見ていくことで、当時の日本が「東京五輪」に向けた情熱と誇りを感じ取っていただければと思います。

（瓜生由起）

画像2

画像3

画像4

博物館日誌（令和3年9月～令和4年3月）

9月

- 2日(木)
  館内害虫駆除
- 14日(火)
  春江西小学校　来館
- 18日(土)
  歴博講座「福井県所在「地図屏風」の世界」(講堂)
- 23日(木・祝)～12月27日(月)
  写真展「ふくいのまち並み今昔」(エントランスギャラリー)
- 24日(金)
  磯部小学校　来館

10月

- 1日(金)
  山代小学校　来館
  金明小学校　来館
- 6日(水)
  鹿谷小学校　来館
- 8日(金)
  服間小学校　来館
- 14日(木)
  中河小学校　来館
  名田庄小学校　来館
- 19日(火)
  王子保小学校　来館
- 23日(土)～11月28日(日)
  特別展「景色の歴史をたどる
  ～絵図・地図からみる越前若狭のまちとむら～」(特別展示室)
- 26日(火)
  足羽中学校　来館
- 28日(木)
  森田小学校　来館
  館内空気環境調査

11月

- 1日(月)
  荒土小学校　来館
- 2日(火)
  啓蒙小学校　来館
- 3日(水・祝)
  特別展展示説明会(特別展示室)
- 4日(木)
  鷹巣小学校　来館
  進徳小学校　来館
- 5日(金)
  円山小学校　来館
- 9日(火)
  春江小学校　来館
- 11日(木)
  福井工業高等専門学校　来館
- 12日(金)
  春江西小学校　来館
- 15日(月)
  中藤島小学校　来館
- 16日(火)
  社北小学校　来館
- 17日(水)
  学芸員出前授業　美山啓明小学校
- 18日(木)
  木田小学校　来館
- 20日(土)
  歴博講座「変わる景色・変わらない景色
  ～絵図・地図からみるまちとむらの歴史～」(講堂)
  フレンドリーアート号
- 26日(金)
  東藤島小学校　来館
  はぴりゅう来館

12月

- 2日(木)
  高椋小学校　来館
- 3日(金)
  大関小学校　来館
- 9日(木)
  宝永小学校　来館
- 10日(金)
  福井県博物館協議会　実務研修会(講堂)

1月

- 3日(月)～5月17日(火)
  パネル展「戦国越前の謎を解く～明智光秀(青の10年)・一乗谷朝倉氏遺跡資料館編～」(エントランスギャラリー)
- 7日(金)～2月8日(火)
  県栄誉賞・特別賞受賞選手等身大パネル設置
  (エントランスギャラリー)
- 18日(火)
  上志比小学校　来館
- 20日(木)
  加戸小学校　来館
- 21日(金)
  木部小学校　来館
  鳴鹿小学校　来館
- 25日(火)
  南条小学校　来館
- 31日(月)
  博物館運営協議会(研修室)

2月

- 3日(木)
  学芸員出前授業　鳴鹿小学校

3月

- 2日(水)
  消防訓練
- 4日(金)
  JTBツアー　来館
- 7日(月)
  新出資料「真柄氏家記覚書」について記者会見(県庁)
- 9日(水)
  まちづくり福井「だるま屋少女歌劇」について記者会見(県庁)
- 11日(金)
  常設展示更新
- 12日(土)～5月10日(火)
  企画展「戦国越前の謎を解く
  ～真柄十郎左衛門の正体など～」(特別展示室)
- 19日(土)
  歴博講座「五輪・総体・国体
  ～1960年代 福井の社会と体育～」(講堂)
- 23日(水)
  常設展示更新

ミュージアム・サポーターズクラブ「体験！昭和のあそび～春編～」
（令和4年5月7日）

夏季特別展　ふくいの御乗物

開催期間：令和4年7月23日(土)～8月31日(水)
※会期中無休
観 覧 料：一般400円　大学・高校生300円
小中学生・70歳以上の方200円
※20名以上の団体は2割引

※会期・内容は、予告なく変更される場合があります。
公式サイトなどで最新の情報をご確認の上、ご来館くださいますようお願い申し上げます。

［編集・発行］
福井県立歴史博物館
〒910-0016 福井市大宮 2-19-15　TEL.0776-22-4675 (代)
https://www.pref.fukui.lg.jp/muse/Cul-Hist/

ふくいミュージアム
No.65　令和4年6月23日発行